平和への思い新たに

わたしの戦争体験談

③

①

②

①広島の大竹海兵団に所属していたころの沖田さん（上段右から２番目）。
戦友の多くが特攻隊に志願しましたが、志を果たせないまま戦死しました。

②いつももんぺ姿だった眞砂子さん。
お母さんの計らいで、着物に着替え、自宅で撮影した写真です。
昭和19年のことでした。

③旧長門館の前で兵隊に抱かれている吉田さん。（前列右から３番目）
戦地へ送られる前の若い兵隊さんたちが来て、1・2泊していったそうです。

二十歳の夏に見た悪夢

坂手町
沖田一彦さん（83）

その日、広島県大竹の空は、雲一つなく暑い日でした。

わたしは軍服を脱ぎ、裸ひとつで大竹海兵団の兵舎を出発、裏山の中腹へ着くと、いつものように「蛸壺」と呼ばれる人間一人の入れる防空壕を掘る作業に掛かりました。

スコップ、ツルハシなどで山肌を削った後、一息ついて腰を下ろし、汗をぬぐっていたときでした。午前8時過ぎ、突然閃光がきらめき、しばらくするとドカーンと音がしたので、思わず立ち上がり東の方向を見ると、雲が竜巻のように上っていき、その先端は傘の形に広がっていきました。何があったのかと見ていると、「手を休めるな。あれは呉方面にて爆発かも知れん、みな早く作業に掛かれ」と班長に怒鳴られました。

翌日、班長より「昨日の爆発は、米軍の新型爆弾である。広島に被害があったようだが、心配するな」と聞かされました。

それから2、3日経った朝の整列のとき、分隊長から「本日の課業は、大竹駅へ行き、けが人の搬送作業。かかれ！」の号令を受け、わたしたちは駅に向かいました。

駅に着くと天蓋（てんがい）付きの貨物列車に多くの負傷者が乗っていて、それぞれ泣きわめいていました。見ると、全身黒こげで焼けただれ、中には片腕や片足が無い人もいました。

わたしたちは、どうしてよいやらただ呆然としていると、班長から「負傷者を担架に乗せ、民家まで運べ」と号令が掛かり、一斉に作業に取り掛かりました。途中、「水を…水を飲ませてくれ」と言う声が聞こえたので、水筒の栓を抜き口まで持っていこうとすると、班長に「水を飲ますな、すぐに死ぬぞ」と言われ手が止まり、「もう少しの辛抱だ、頑張れ！」と大声で叫んで励ましました。しかし、その人は、民家に着くまでに息が無くなりました。後になって、「たとえ一滴の水でも口に移してやれば…」と思わず涙がこぼれました。

何回負傷者を運んだか定かではありませんが、その夜は心身ともに疲れていたにもかかわらず、昼間の異臭や泣き叫ぶ声が耳から離れず眠れませんでした。二十歳の夏でした。

このようなことが二度と起こらない平和な世の中であり続けることを祈っています。

敗戦直後に起こった樺太の惨劇

松尾町
堀口眞砂子さん（87）

昭和20年8月9日、ソ連が日本に宣戦を布告しました。

当時、わたしは日本領の南樺太（現在のサハリン）にある樺太庁立豊原高等女学校の音楽教師として勤めていました。

8月14日、お盆の休暇が出たので、汽車で4時間かけて家族のいる真岡（まおか）町に帰り、翌日終戦を知りました。

わたしはすぐ学校へ向かい、先生や千百名の生徒全員と講堂で慌ただしいお別れ会の後、家に戻りました。

次々と周りが引き揚げていく中で、わたしたち家族は、くじ引きで遅れて、引き揚げの準備をしながら乗船の順番を待っていました。

そして、8月20日の朝6時、突然艦砲射撃が始まりました。息もつけない程の激しさでした。縁側の窓から火の手の上がるのが見えました。しばらくして艦砲射撃がやみ、お隣の奥さんが小さいお子さん6人と駆け込んで来ました。わたしの家族と茶の間で12人が固まっていると、ウオッカを飲んだような真っ赤な顔をしたソ連兵が4人ドカドカと入ってきて、外に出され歩かされました。近所の人たちも兵隊と出て来ました。

あちこちで死んでいる人の間を通り、北真岡まで来たときは、辺り一面火の海でした。やがて、塩倉庫に着くと、大勢集められた人の中には、顔を撃たれて話すこともできない人や、自分で殺した赤ちゃんをおんぶしている人もいました。

やがて開放され、しばらくすると、家の周りの様子が分かってきました。

前の家では、赤ちゃんが泣くと皆が中に隠れているのが見付かるというので、お風呂につけて殺しました。

裏の兄さんは、結核で長い間床についていましたが、布団の下に隠してあった刀で割腹して死に切れず、医者もいない中、三日程で亡くなったようです。

近くの中学校の教官は、自分の家族と知人の奥さんとこどもの首をはね、自分も割腹して命を絶ちました。

また、その隣の奥さんは、はさみで自分とこども2人の舌を切り、死ねずにわたしたちが集まっていた家の前にも来ましたが、どうすることもできず、3人の弱々しい泣き声が、今も耳から離れません。

ソ連軍の侵入で、このような悲惨な出来事がたくさん起こりました。

鳥羽の戦中戦後 少年時代の記憶

一丁目
吉田謙一さん（71）

わたしが、国民小学校の1年生のとき、鳥羽にも艦載機が来襲し、機銃掃射を受けました。そのとき逃げ込んだ防空壕の中で聞いた飛行機の爆音と機銃掃射の音は、本当にすさまじいものでした。雷どころの騒ぎではなく、壕の中で恐怖に身を縮め、防空頭巾をしっかり押さえて過ぎていくのを待ったことを覚えています。

当時、相島（おじま）（今のミキモト真珠島）に防備隊の基地があり、坂手島との間に大きな輸送船が2隻停泊していました。艦載機は、それらを攻撃したのです。空襲警報が解除されて見に行くと、堤防側の船は撃沈され、木っ端みじんになったすごい量の木片が浮いていました。坂手側の船は、座礁して炎上し、煙が出ていました。

戦時中、鳥羽駅前にあった海月や錦浦館など数件の旅館は、海軍や陸軍に接収され宿舎になっていました。父が経営していた長門館も陸軍の将校クラブとして使われ、多くの兵隊が出入りしていました。営業できなくなった父は、家族を養うために軍需工場へ働きに行っていました。

そのころ、初めてアメリカ人を見ました。警察官が手錠をかけて駅へ連行するために家の前を歩いて通っていったときです。「鬼畜米英」と教育されていたわたしたちこどもは、砂利道に落ちている石を拾って、そのアメリカ兵を追い掛け、ぶつけたことを覚えています。

戦争が激しくなり、食糧が無くなって母とわたしたち兄弟3人は、母の実家のある伊勢市村松町へ疎開しました。そのころ、真っ昼間にB29が編隊を組んでずーっと飛んでいくのを見ました。こどもだったわたしは、恐怖心よりも太陽の光を受けてB29のジュラルミンの機体が、ピカッ、ピカッと光るのをきれいだなあと思ったことを覚えています。名古屋の大空襲があったのは、その夜でした。

家の前は貨物列車の終点で運送会社があったので、戦争が終わるとアメリカのMPがいつも立っていました。じゅうぶんな食糧もなく、いつも空腹だったわたしは、家にある舞妓さんのハガキを持って、「ギブミーチョコレート」とそのアメリカ兵にせがんで、もらった記憶があります。

戦中戦後は、こどもにとっても不安で過ごしにくい時代でした。